

2024年9月15日 説教「元気を出しなさい」

使徒の働き 27章 13～26節

囚人パウロたちを伴った船はカイザリヤを出てシドンから、キプロス島を経て、ミラに入港。そこからローマ行きの船に乗り換え、クレテの良い港に着きました。パウロはそこに留まるべきであると伝えましたが、百人隊長は同じ島のピニク行きを指示します。



### 1. 吹き流された船 (13～17節)

① 錨を上げて (13) 「おりから、穏やかな南風が吹いて来ると、人々はこの時とばかり錨を上げて、クレテの海岸に沿って航行した。」

ちょうど都合よく南風が吹いて来ましたので、船長や船員たちは錨を上げて、出帆させました。当初は穏やかな風で、船はクレテ島の海岸に沿って、ピニクスに向かったのです。

② 暴風が吹きおろし (14～15) 「ところが、まもなくユーラクロンという暴風が陸から吹きおろして来て、船はそれに巻き込まれ、風に逆らって進むことができないので、しかたなく吹き流されるままにした。」

しかし、まもなく前兆もなく、暴風ユーラクロンが襲って来ました。クレテ島の2千メートルを超えるやまや来しました。

③ 航行に困難が (16～17) 「しかし、クラウダという小さな島の陰に入ったので、ようやくのことで小舟を処置することができた。小舟を引き上げ、備え綱で船体を巻いた。また、スルテスの浅瀬に乗り上げるのを恐れて、船具をはずして流れるに任せた。」

船はカイザリヤから150キロほど北にあるシドンに入港。百人隊長。

### 2. 困難の中に語り出したパウロ (18～21節)

① 積荷や船具を捨てて (18～19) 「私たちは暴風に激しく翻弄されていたので、翌日、人々は積荷を捨て始め、三日目には、自分の手で船具までも投げ捨てた。」

船はキリキヤ州とパンフリヤ州の沖を航行。ルキヤ州のミラに入港しま

② 望みを絶たれ (20) 「太陽も星も見えない日が幾日も続き、激しい暴風が吹きまくるので、私たちが助かる最後の望みも今や絶たれようとしていた。」

ミラ港た船は、やはり向かい風で、進みは遅く、やっとのことでクシ

③ パウロのメッセージ (21) 「だれも長いこと食事をとらなかったが、そのときパウロが彼らの中に立って、こう言った。『皆さん。あなたがたは私の忠告を聞き入れて、クレテを出帆しなかったら、こんな危害や損失をこうむらなくても済んだのです。』」

クレテ島の南側の岸に沿って進んだ船は、北西風を受けながらも、

### 3. パウロの確信の訴え (22～26 節)

①失われるのは船だけ (22) 『しかし、今、お勧めします。元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う者はひとりもありません。失われるのは船だけです。』

向かい風から船が遅れたことから、日数が過ぎていました。すでに

②恐れてはいけません (23～24) 『昨夜、私の主で、私が仕えている神の御使いが、私の前に立って、こう言いました。<恐れてはいけません。パウロ。あなたは必ずカイザルの前に立ちます。そして、神はあなたと同船している人々をみな、あなたにお与えになったのです。>』

そんなことから、パウロなりの意見を述べたのです。つまり、このまま

③信じています (25～26) 「ですから、皆さん。元気を出しなさい。すべて私に告げられたとおりにになると、私は神によって信じています。私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます。」

しかし、百人隊長は航海士や船長の意見を信用しました。ある面では

#### 《結論》

今朝の聖書箇所では、パウロはいよいよイタリア(ローマ)に向けて、船出することになります。使徒 23:11 で、主はパウロに次のように語られていました。「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならぬ」。ローマ行きについては、ここに至るまで様々な経緯があり、もはや実現しないのではと思われる事態もありました。しかし、主の御言葉は真実で、それは着々と実現しようとしていたのです。

しかし、船に乗ったものの、旅は簡単ではありませんでした。カイザリヤからシドンを経て小アジアの東とキプロス島の間を通過して進むのですが、向かい風でなかなか進みません。ルキヤ州のミラを経て進むと、逆風は続き、船は南へと向かいました。結果、クレテ島の東側から、島沿いに進み良い港に辿りつきました。ここは滞在場所としては悪い所ではなかったのですが、冬の期間を過ごすとなるとベストではないともいえました。しかし、時は航行禁止の期間に入っていました。商売上の理由もあってか船長は進行してピニクスで冬を過ごすことを提言。多くの者たちもそれに賛同しました。

ここで、パウロは『皆さん。今ここで航行を続けるとするなら、きっと大きな損失や危害がもたらされることになります』と叫んだのです。彼は船のことについては素人です。しかし、三回の伝道旅行などから、地中海の気候や船旅については、経験が豊富で難船の経験もありました。そんなことから、このような発言をしたのでしょう。

この場面においては、パウロが主から御言葉に導かれたといった記述はありません。その面においては、私共が日常生活と共通していて、学びやすいのではと思われます。

それでは、パウロはただ単に経験や知識から判断して、直感的にこのような発言をしたのでしょうか。そもそも彼には「神は、この世の知恵を愚かなものにされた」(I コリ 1:20)という考えを持っています。知識や知恵は持っていましたが、ギリシャ人のようにそれらに頼るというメンタリティーは持っていませんでした。彼が求めたのは「隠された奥義としての神の知恵」(I コリ 2:7)でした。

それでは、その知恵を彼はいかにして得たのでしょうか。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことがないもの、人の心に浮かんだことのないもの」(I コリ 2:9)は「御霊によって私たちに啓示されたのです」(I コリ 2:10)と述べています。とすれば、表には出ていませんが、彼が良い港に留まることを訴えたのは、主からの促しによったと考えられます。パウロは祈りのうちに、道を示されていたのです。だからこそ、船長をはじめ大方の人々が出帆を訴えるなかでも、留まることを主張できたのです。

私たちもパウロと似たような場面に遭遇することがあるでしょう。その時に、「臆病からではなく、力と愛と慎み」(II テモテ 1:7)をもって進むには、主なる神との交わりを経なければ、とても現実の流れに抗うことなど、できません。仕事であれ、個人のことであれ、何らかの方向を迫られたときに、私たちがなすべきことは、主なる神を呼ぶこと(エレミヤ 33:3)です。